はじめに

本書は、主に民俗学と臨床心理学とによる『遠野物語』の共同研究をベースとした論集である。そのきっかけとなったのは、二〇〇七年九月一三日に赤坂憲雄さんに行っていただいた、「『遠野物語』の心的構造」と題する、京都大学こころの未来研究センターでのセミナーである。赤坂憲雄さんとは梅原猛先生の文部省重点領域研究チーム「文明と環境」で一九九〇年代のはじめに知り合ったが、久しぶりの再会であった。セミナーの夜に京都の町に飲みに行った際に盛り上がって、『遠野物語』についての学際的な研究会をはじめることが決まったのである。

心理療法をベースとする心理学は、人のこころという形のないものに関わる。だからある意味でそれ自体は明確な対象を持たず、あらゆる言説が可能な領域であるとも言える。ゆえに心理学は人のこころの持つ豊かな可能性を示唆しつつも、対象や根拠が曖昧になるという批判を避けられない。だからこそユングは錬金術のテキストを大切にし、それを研究したと考えられる。心理療法は向かい合うテキストを必要とする。

そのようなことを熱く語るうちに、一緒に何かのテキストを読もうということになり、それに

『遠野物語』が選ばれた。民俗学、あるいは赤坂憲雄さんの方からしても、ややもすると細かな考証に終始しがちな自分の学問における閉塞感を打ち破りたいということがあったのかもしれない。

二〇〇八年三月四日を第一回として、ほぼ年二回のペースで八回の「遠野物語研究会」を行った。ユング心理学の側では、河合の他に田中康裕さん、岩宮恵子さんがコアなメンバーとなり、民俗学の側では赤坂さんの他に、国文学の三浦佑之さんが重要なメンバーとなった。第三回は「オシラサマと河童」、第四回は「山男・山女」などのように、テーマと読む話を決めて行うことも多かった。今回の論集に書いていただいた方の他にも、何人もの方が研究会に参加し、発表を行ってくださった。研究会を常にオーガナイズしてくださっていた、赤坂憲雄さんの側の今石みぎわさん(現東京文化財研究所無形文化遺産部研究員)、河合の側の畑中千紘さん(現京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)に感謝したい。

このようにテキストを共有しての研究会は、非常に実り豊かなものであった。心理学の側にとって、『遠野物語』というテキストに取り組むことはおおいなる挑戦である。それにはグリム童話などに基づいた、わかりやすい物語論や自己実現論が当てはまらない。同時に、雑然としたその語りは、心理療法で聴くものに非常に近い。そのような感覚からつかみとったものを恐る恐る発表してみると、赤坂憲雄さんをはじめとする異分野の方に非常に評価し、共感してもらえることがあった。また逆に、心理学から見えてきたような読みが、これまでの民俗学的な研究による実証からあっさりと否定されてしまうこともあり、それはそれでありがたかった。今石みぎわさんの発表をはじめ

として、民俗学の側の発表も、何か心理学側の発表に呼応していて、心理学に対して示唆的であることも多くなっていった。また、それぞれの発表についての赤坂憲雄さんのコメントはいつも刺激的なものであった。分量的な問題と、統一感がなくなるために、今回の論集では、それを割愛せざるをえなかったが、その一端は「あとがき――新たな読みの作法は可能か」で感じとっていただければと思う。遠野に一緒にフィールドワークに行ったことにもとても意味があって、物語に描かれているコスモロジーを実感することができた。このような研究会を通じて浮かび上がってきたキーワードが「遭遇」である。『遠野物語』では、異質の他者との遭遇が描かれている。

このような初期の成果は、『季刊 東北学』第二三号(二〇一〇年)におけるいくつかの論考となって結実した。しかしこの研究会は、二〇一一年三月一一日に東北を襲った大震災によって大きな転回点を迎える。その後の九月に開かれた第八回研究会で、三浦佑之さんは「遠野物語と三陸」という題で発表し、第九九話とその類話を取り上げてくれた。そしてそれにつながる形で二〇一二年一〇月に島根大学で開かれた、岩宮恵子さんを大会委員長とする日本箱庭療法学会で「物語と鎮魂」と題するシンポジウムが開かれ、赤坂憲雄さん、三浦佑之さん、河合俊雄というこの研究会の中心メンバーがシンポジストを務めたのである。このようにして、この論集のもう一つの大きなテーマである「鎮魂」が前面に現れてきた。

このような流れを踏まえて、この論集ではまず第一部は「遭遇」をテーマにしている。第二部はさらに物語から展開していったテーマが、実際の心理療法、歌謡、遊びなどとの関連で扱われてい

る。そして第三部では、明治三陸大津波に関連する第九九話についての三浦佑之さんの論を元にしつつ、さらにその話についての三人の論考を集めて、「鎮魂」をテーマとしている。このような企画をまとめていただき、また執筆者を励ましていただいた岩波書店の田中朋子さんに感謝したい。

思えば、この研究会をはじめることを赤坂憲雄さんと思い立ったのは、河合隼雄追悼式のわずか一〇日後である。その意味で本書を、震災の犠牲者の方々のみならず、死者の魂に捧げたい。

河合俊雄

目次

遠野物語　遭遇と鎮魂

はじめに……河合俊雄 v

Ⅰ

「遭遇」という主題

出会いのトポス
――描かれた山と人間……今石みぎわ 3

『遠野物語』と意識の成立……河合俊雄 31

近代と前近代の狭間で消え去るお話たちのお話
――「狼」話群からみた「遠野物語の意識」……田中康裕 55

Ⅱ

物語の豊饒を継いで

異人は遊ぶ……岡部隆志 81

抒情詩としての『遠野物語』
――もう一つの言葉の可能性をめぐって……川野里子 107

「語ることのできないもの」
――物語と共同性……猪股　剛　135
異界につながる物語の力
――『遠野物語』と心理療法……岩宮恵子　165

Ⅲ　鎮魂の物語　第九九話を読む

九九話の女
――遠野物語と明治三陸大津波……三浦佑之　191
和解について……赤坂憲雄　217
福二の三度の喪失……田中康裕　227
九九話におけるインターフェイスと振り返り……河合俊雄　239
あとがき――新たな読みの作法は可能か……赤坂憲雄　251

＊本書における『遠野物語』の底本は、角川ソフィア文庫（二〇一二年）とした。

九九話の女

――遠野物語と明治三陸大津波

三浦佑之

交易地としての遠野

はじめて『遠野物語』を読んだ人は、岩手県遠野というところはずいぶん山深い、閉鎖的な土地だと思うだろう。そして、それも遠野の一面ではあるのだが、けっしてそればかりではない。たとえば、山男や山女を語る話の背後にいつも見え隠れするのが、山を越えた向こうの世界であるということひとつとっても、遠野という土地とそこに住む人びとの想いはわかるはずだ。

山深い遠野の人びとは、険しい峠を越えて海岸の釜石や大槌（おおつち）や山田など三陸沿岸の人びとと頻繁に交流していた。江戸時代には遠野南部家の城下町として繁栄した、沿岸と内陸とを結ぶ交通の要衝である遠野は、定期的に市が立ち物や人や馬が行き交う「煙花の街」（『遠野物語』初版序文）だった。そして、そのいくつもの街道を動くのは、目に見える物資ばかりではない。人と人とをつなぐ心が

交流し、人が伝える話を移動させもする、それが市であり道であった。

そうした遠野という土地の重要性を改めて思い知らされたのは、あの東日本大震災のあとだった。震災のあと遠野に行ったわたしは、復興支援シンポジウムのパネリストであった岩手県上閉伊（かみへい）郡大槌町の職員からこんな報告を聞いた。

町長をはじめ多くの人が犠牲となり、町の大半が流出した大槌町では、高台にある公民館や学校などに避難した人びとへの食料の確保がすぐに問題になった。震災当日の夜、避難所の運営にあたっていたその職員は、焚き出しのための米を手に入れようと、海岸沿いの国道は使えないので今はあまり使われない山道を抜けて遠野に向かう。やっと遠野に着き、長蛇の列のガソリンスタンドに並んでいたら運よく遠野市役所の職員と出会い、彼の機転によってガソリンを手に入れ、米も確保して避難所にもどることができた、と。

東京にいるわたしが、テレビ画面に映し出された押し寄せる津波を呆然と眺めていた時、海岸から隔たってはいるが地震で大きな被害を受けた被災地の遠野には、停電のために沿岸地域の被害状況はほとんど入っていなかった。そのなかで、三月一一日当日から市の職員や市民ボランティアがいっせいに支援体制に入り、三陸沿岸の市や町に食料や日用品などを届けはじめたのである。一例をあげると、市民ボランティアと市職員延べ二〇五〇人が、震災の日から二九日間で一四万二四〇〇個ものおにぎりを作って被災地に届けたという（遠野市『3・11東日本大震災 遠野市後方支援活動検証記録誌』二〇一三年）。

震災後の遠野の人びとの復興支援活動は称賛に値するが、それが可能となったもっとも大きな要因は、遠野という場所が前近代からずっと担っていた役割によるのではないかと思う。端的にいえば、遠野は、人びとの交流するための中継点に位置していた。そのことは、『遠野物語』第二話の、「遠野の町は南北の川の落合にあり。以前は七七十里とて、七つの渓谷各七十里の奥より売買の貨物を聚め、その市の日は馬千匹、人千人の賑はしさなりき」とある文章によく示されている。

こうした市や街道によって培われた人びとのつながりは、道路が整備され鉄路が通じるようになった近代にも消えることはなかった。それゆえに、今回の大津波においても、遠野の人びとは自分たちが果たすべき役割を見失わなかったのである。

五　遠野郷より海岸の田ノ浜、吉利吉里（きりきり）などへ越ゆるには、昔より笛吹峠（ふえふきたうげ）といふ山路あり。山口村より六角牛の方へ入り路のりも近かりしかど、近年この峠を越ゆる者、山中にて必ず山男山女に出逢ふより、誰も皆怖ろしがりてしだいに往来も稀になりしかば、つひに別の路を境木（さかひけ）峠（たうげ）といふ方に開き、和山（わやま）を馬次場（うまつぎば）として今はこちらばかりを越ゆるやうになれり。二里以上の迂路なり。

四九　仙人峠は登り十五里降り十五里あり。その中ほどに仙人の像を祀りたる堂あり。この堂の壁には旅人がこの山中にて遭ひたる不思議の出来事を書き識（しる）すこと昔よりの習ひなり。たと

へば、われは越後の者なるが、何月何日の夜、この山路にて若き女の髪を垂れたるに逢へり。こちらを見てにこと笑ひたりといふ類なり。またこの所にて猿に悪戯をせられたりとか、三人の盗賊に逢へりといふやうなる事をも記せり。

今はトンネルが通じた仙人峠は、釜石に抜ける街道の難所であった。それゆえに越後の人までが越えたという賑わう峠道でありながら、不思議にあふれた恐ろしい場所だった。その恐怖は、人びとの口から耳へと伝えられ、物といっしょに峠道を往き来した。それにしても、第四九話にあるような盗賊がほんとうにいたとすれば(誇張もありそうだが)、人の往来はそうとうに多かったということになる。

遠野は四囲を山に囲まれた盆地で、どこへ出るにも峠を越えなければならない。第五話にある笛吹峠は、田ノ浜(現、山田町船越の「田の浜」地区)や吉利吉里(現、大槌町吉里吉里)と遠野とを結ぶ山道だ。仙人峠の北に位置する笛吹峠も、山男や山女に出くわすことの多い恐ろしいところだった。そのため、遠回りになるのを承知で北の境木峠を使うようになったと語るが、境木峠を通れば安全かというとそうはいかない。

三七　境木峠(さかひげたうげ)と和山峠(わやまたうげ)との間にて、昔は駄賃馬を追ふ者、しばしば狼に逢ひたりき。馬方等は夜行には、たいてい十人ばかりも群れをなし、その一人が牽く馬は一端綱(ひとはづな)とてたいてい五、六

七匹までなれば、常に四、五十匹の馬の数なり。ある時二、三百ばかりの狼追ひ来たり、その足音山もどよむばかりなれば、あまりの恐ろしさに馬も人も一所に集まりて、そのめぐりに火を焼きてこれを防ぎたり。（以下、略）

近代になると間もなく絶滅するニホンオオカミが、ここに描かれているほどの群れをなして棲息していたとは考えにくい。おそらく、旅人たちの恐怖がこうした伝承を語り継がせてゆく。それがまた恐れを増幅させ、オオカミや山男・山女に山中で遭遇したという話が『遠野物語』にはあふれることになった。

外部を遮断する境界は、同時に内と外とが接触する場所として存在した。それゆえに、峠をめぐって語られる恐れは、共同体を超えて人と人とをつなぐ役割も果たした。

海から来た男女

『遠野物語』第九九話の哀愁

直線で測ると、遠野から海岸の釜石・大槌までは約三〇キロ、宮古までは五〇キロあまり。交通の発達した現在でも、人が日常的なつながりを実感できるのはその程度の距離ではないかと思う。そして、その範囲が前近代の社会では交易圏・経済圏として存在し、人びとが結婚関係を取り結ぶ

婚姻圏にも重なっていた。

今回の大津波によって、一八九六(明治二九)年六月一五日(旧暦五月五日)に襲来した明治三陸大津波の記憶が呼び覚まされているが、『遠野物語』第九九話には、その時に生じたという余韻をひく話が伝えられている。

九九　土淵村の助役北川清といふ人の家は字火石(ひいし)にあり。代々の山臥(やまぶし)にて祖父は正福院といひ、学者にて著作多く、村のために尽くしたる人なり。清の弟に福二といふ人は海岸の田の浜へ婿に行きたるが、先年の大海嘯(おほつなみ)に遭ひて妻と子とを失ひ、生き残りたる二人の子と共に元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の初めの月夜に便所に起き出でしが、遠く離れたる所にありて行く道も浪の打つ渚なり。霧の布(し)きたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女はまさしく亡くなりしわが妻なり。思はずその跡をつけて、はるばると船越村の方へ行く崎の洞ある所まで追ひ行き、名を呼びたるに、振り返りてにこと笑ひたり。男はと見ればこれも同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互ひに深く心を通はせたりと聞きし男なり。今はこの人と夫婦になりてありといふに、子供は可愛くはないのかといへば、女は少しく顔の色を変へて泣きたり。死したる人と物言ふとは思はれずして、悲しく情なくなりたれば足元を見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦へ行く道の山陰を廻り見えずなりたり。追ひかけて見たりしがふと死したる者なりと心付

き、夜明まで道中に立ちて考へ、朝になりて帰りたり。その後久しく煩ひたりといへり。

北川清は、『遠野物語』の伝承を柳田国男に語った佐々木喜善の祖母チエの兄（大伯父）にあたる人物であった。一八四〇年に土淵村（現、遠野市土淵町）に生まれ、一九二一年に没した（遠野常民大学編『注釈遠野物語』筑摩書房、一九九七年）。

その北川清の弟福二が婿入りしたという海岸の田の浜は、第五話にも地名が出てきたことからわかる通り、遠野とは一つの交易圏・経済圏をなす土地であった。そうした関係は婚姻圏を共有するゆえに、内陸の遠野から婿に入る男もいる。そして、当時の婚姻関係を踏まえれば、家柄としては、田の浜の婿入り先のほうが北川家よりも優位な立場にあったとみてよかろう。

こうした関係は、『遠野物語』のなかでもよく知られた第五五話によって確認することができる。五五話は、新張村から婿をとった松崎村の女が子を孕み、河童の子だとか間男がいるとかの噂が村人のあいだに広まるなか、馬槽に水を張り、そのなかで無事に出産する。しかし、産まれた「手に水掻」のある子は、女の父親の手で切り刻まれ土中に埋められる。

新張村の婿の家と婿入り先の松崎村の家とをくらべれば、明らかに松崎の家が格上である。そのことは、松崎の家が村会議員も務める「如法の豪家」であると語られていることからはっきりと読み取れる。その家格の違いが、第五五話の伝承の背景になっている。おそらく、女が魅入られたという河童は、村人の噂になっているように、「村の何某」と重なっているとみなすことができる。

想像をたくましくすれば、女には昔から付き合っている相思相愛の男がいた。それにもかかわらず、男子のいない松崎村の家では、後継ぎを求めるために新張村から婿を迎え入れた。だが、その後も女と「村の何某」との不倫関係は続いており、女はその間男の子を妊娠した。川端の家では、家の体面を守るために、女が生んだ子を密かに処分するしかなかった。それが「河童の子」という噂が流れる原因としてあり、その発信源は、息子の立場や家の体面を潰された婿の父であった(三浦『村落伝承論』五柳書院、一九八七年。赤坂憲雄との共著『遠野物語へようこそ』ちくまプリマー新書、二〇一〇年)。

このように読みとると、第五五話の基本的な構造は、第九九話と同じだということに気づくはずだ。婿に入った福二も知っていたのだが、妻には以前付き合っていた男が田の浜にいた。そのことは、村の中ではだれもが知っている。その関係が裂かれ、福二が婿に入った。その、だれもが知っている秘め事が、突然村を襲った大津波によって村人の前にさらされたのである。あるいは、当事者である福二の心に昔の記憶が呼び覚まされ、衝撃として突き刺さったと言うべきか。何事もなければ平穏に過ぎていったであろう日々を、大津波がなぎ倒してしまう。同様に、第五五話では女の妊娠を契機に、村人たちのあいだを噂が駆けめぐる。

第九九話を理解する上でだいじな点は、この話が当事者である福二の体験として語られているということである。一方の第五五話では、川端の家とは利害を異にする新張村の婿の家の側から流れ出た噂として語られる。そのために第五五話では、悪意や蔑みを込めて河童の子が語られる。それ

に対して第九九話は、哀愁をこめた話として流通する。その理由は、この出来事が大津波という異常な事態によってもたらされた女の死を福二自らが語っているために、妬みや蔑みといった噂をはるかに超える悲哀を抱え込んだからである。そこでは、津波で死ななければならなかった女(同じように苦しみながら亡くなった多くの人びと)に対する、同情や哀悼の心が優先するのである。

三月一一日の大津波がそうであったように、明治三陸大津波でも多くの人びとの命が呑み込まれてしまった。夫と妻、親と子が別れ別れになり、親戚も友人も、あらゆるつながりが断ち切られた。その断ち切られた関係をどのように修復するか。生きている側は、どのようなかたちで死を受け入れ死者に別れを言うか。その時、第五五話と同じ構造をもちながら、まったく別の方向に向かう話が語られることになる。

明治三陸大津波と田の浜

第九九話の舞台である田の浜という集落は、今回の津波でも大きな被害を受けた。山田町船越の田の浜地区では、六割以上の家屋三二四戸が全壊した(山田町ホームページ、http://www.town.yamada.iwate.jp/)。津波の規模を比較するのは容易ではないが、田の浜にかぎっていえば、明治三陸大津波の被害のほうが今回の被害を大きく上回っていたことは、山田警察署が作成した「海嘯被害明細図(明治二九年)」に載せられた被害情況によって確認することができる(遠野常民大学編『注釈遠野物語』掲載の図版参照。山田町立図書館蔵)。それによると、「船越村字田ノ浜」の被害は、次のような驚く

べき数にのぼる。

海嘯前戸数　弍百三十八戸　流失戸数　弍百二十九戸
全壊戸数
半壊戸数
浸水戸数

同　人口　死亡人口　四百八十三人
負傷　一百人
現存者　男　弍百七十七人
女　弍百四十八人
受救助者　男　弍百七十七人
女　弍百四十八人

他の土地では多かったはずの全壊や半壊などの家は一戸もなく、高台の九戸を除いてことごとくが流失し（流失戸数について、『注釈遠野物語』は一三八戸中一二九戸とするが、翻刻の誤りと判断した）、半数近くの住民が死亡するという惨状であった。この警察署の記録が正確なものかどうかはわからない。というのは、典拠資料は示されていないが、吉村昭『三陸海岸大津波』（文春文庫、二〇〇四年）

「明治二十九年の津波」条に記された「挿話」には次の記述がみられるからである。

東閉伊郡船越村

当村は船越、田ノ浜、大浦の三字で成り、その被害は惨憺たるものがあった。田ノ浜では全戸数二三六戸がことごとく流失し、人口一、三〇〇名中、九四五名が死亡するという惨状を呈し、救援もおくれて死臭は全村をおおった。（略）

そうした惨状のなかで語り継がれた話の一つが、『遠野物語』のなかに遺されることになった。一八九六（明治二九）年の大津波については、その二五年後に三陸海岸を歩いた柳田国男が、唐桑浜（宮城県気仙沼市）の宿という集落での聞き取りを「二十五箇年後」という文章に遺しているが、そのなかで、「死ぬまじくして死んだ例も固より多からうが、此方は却つて親身の者の外は、忘れて行くことが早いらしい」と述べ、奇跡的に助かったというような一筋の光明を語る話のほうが遺りやすいのではないかと述べている（一九二〇年「朝日新聞」連載、『柳田国男全集』三巻、筑摩書房、一九九七年）。たしかに、「死ぬまじくして死んだ」という哀切きわまりない話ばかりではやりきれないわけで、そういう話は忘れてしまいたいという気持ちもよくわかる。そのなかで「死ぬまじくして死んだ」女の話が伝えられ、聴き知っていた佐々木喜善が語って柳田国男が文字にしたのが第九九話である。